

建築家よ世界へ!

主導する構造家・揚原茂雄

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■入るべくしてSGDへ

構造家の揚原茂雄さんは、1975年東京生まれ。小学校のとき、自宅新築工事の建築模型を見て建築の面白さを感じたそう。厳しい父親は絵描きになることは反対したが、「建築を志す」ことは応援してくれた。大学2年生のときに、同級生の佐藤裕美さんに誘われて始めたのがSDGでのアルバイト。SDGはすべての作品で構造模型を製作していて、アルバイトを中心に自分たちで考えて模型をつくりながら構造が学べた。また、バイト代も高く「構造設計事務所はなんと凄いのか!」と楽しい日々を過ごしたのでした。その中で、東京フォーラムの模型を見ながら渡辺先生から形態を導き出した理由を教わったことは、「構造デザイン」に出会い、構造設計を生業として生きていくことを決めるほど衝撃だった。学生時代に、自分の方向性を見出してくれた渡辺先生に今でも感謝しています。SDGの構造デザインは力学的な理由だけで形態を決めるのではなく、渡辺邦夫一人の「思想の構造」だという揚原さん。その後、SDGに入所することになるのでした。

■韓国・中国での足掛かり

入所当時のSDGは、海外に目を向け始めたころだった。しかし、韓国のソウルワールドカップスタジアムのコンペでは、現地派遣を希望するスタッフがおらず、渡辺先生から「明日から行ってくれるか?」といわれ、翌々日にソウルに向かうのでした。韓国語は話せなかったが、模型づくりの腕を見込まれての派遣だったと振り返る。ソウルの事務所に3か月缶詰状態で仕事をして帰国。その後も海外プロジェクトがあれば自ら志願して現地に赴き、足掛け2年間、ソウルや蔚山市での生活を体験します。その中で、中田琢史さんから構造デザインを、福田典史さんからは構造設計を学んだといいます。両極端の二人の下で仕事をできたことは、

かけがえのない経験となったのでした。

黙々と構造設計に取り組む実績をつくり、韓国語もマスターしたというから、語学の才もお持ちの揚原さん。海外プロジェクトで協働した現地の設計者たちは今では出世して実権を握っている人も多いとか。そのつながりもあって、現在でも韓国の仕事も多いそうです。

韓国だけでなく、上海旗忠森林体育城テニスセンターで1年、佛山市岭南明珠体育館で1年と、中国の生活も経験した。中国では役所が決めた地元の設計集団と協働したが、皆優秀で責任感が強いために、最初は見解の相違から衝突し、アンビルドとなったプロジェクトもあったといいます。ただ、力学は万国共通。対話を続けることで互いを尊重できる関係を築けたそうです。揚原さんの自然体での人との付き合いは、中国でも友人の輪を広げたい絆をつくったのでした。

■世界で新しい刺激を受けたい

人・食・文化・建物・設計手法などの新しい出会いが海外での仕事の楽しさ。昨今のコロナ禍で海外出張がなくなり、気分が落ちてしまっている揚原さん。テレビ会議での、コミュニケーションは増えたが、構造模型を生でみる感動を上手く伝えられず、共有できない。時には模型を郵送しているそうだ。

揚原さんは、若い設計者達が集まる新宿のシェアオフィスに机を置かせてもらい、Structural NETを開設している。CO₂削減の観点から、海外から木造の問い合わせが増えた。日本ではまだ少ない、大波コルゲートの大空間にもチャレンジしている。妻任せだった息子たちとの日常を取り戻せているのが嬉しい。キャンプをしたり、恵みの時間になっている。小気味よい語りと明るい笑い声で、日本人建築家の世界進出を助太刀する構造家の枠を超える人なのです。

